

短期大学の一般教養課程における福祉教育・ボランティアの導入に関する研究

—授業の中にボランティア体験を採り入れた場合の効果に注目して—

A Study on Introducing Welfare Education and Volunteer Activities into a Junior College Liberal Arts Curriculum

(1999年3月31日受理)

橋本 勇人 別惣 淳二 中原 朋生
Hayato Hashimoto Junji Besso Tomoo Nakahara

Key words : Welfare Education, Volunteer Activities, Junior College

Abstract

The purpose of this paper is to clarify the effects of welfare education and volunteer activities and to consider how to treat them in liberal arts at junior colleges.

We inquired about the effects of introducing welfare education and volunteer activities, and about the use of questionnaires, to which would be distributed three times liberal arts students at a junior college. As a result, students involved in volunteer activities became increasingly interested in such work and developed greater self-confidence. In addition, they agreed to the addition of such courses into the liberal arts curriculum at junior colleges, and wanted to evaluate themselves by the change in their social awareness.

はじめに

従来より、教育関係者及び福祉関係者から、福祉教育やボランティア活動の重要性が指摘されてきた。また、関係省庁からもそれに関するいくつかの重要な提言がなされてきた¹⁾。しかし、そうした提言がなされる場合、教育関係者が、自己実現の側面を重視したのに対し、福祉関係者は他者の福祉の側面（他者実現とでもいうべきもの）を重視する傾向があり、両者の理念には若干の違いがあるとされてきた²⁾。筆者らの理解によれば、前者は、核家族化や少子化に伴う家庭のもつ教育力の低下と、都市化の進展に伴う地域社会のもつ教育力の低下を補うことを期待し、学習者自身の自己実現の理念（憲法13条等）の実現を求めたと言えよう。これに対し、後者は、高齢社会の進展を背景として、福祉社会の実現（憲法25条）をも目指したといえよう³⁾。そして今日、この

教育と福祉との一体的な取り組みが進められている⁴⁾。

このような時代的背景の中で、A短期大学生活学科食物栄養専攻でも、平成6年度より、1年次生を対象とした一般教養科目「福祉とボランティア」(選択2単位、ただし栄養士取得の要件である)を開講した。この科目は、福祉とボランティアに関する歴史、理念、実践例等を中心とした14回の講義と演習(ハンディキャップ体験や車椅子実習を含む)、及び夏休みを利用したボランティア体験とそのレポート作成から構成されている。このように短期大学の授業の中にボランティア体験を導入したのは、現代の若者を対象として人間性豊かな栄養士を育成するためには、座学を中心とした大学・短期大学教育だけでは十分ではなく、その短所を補完するものとしてのボランティア体験の必要性を痛感したからである。また、同時に社会へ出る直前の学生と関わる短期大学は、学生自身の生き方にかかわること(福祉)へのきっかけづくりをする役割も負っていると考えたからである。

しかし他方で、授業の中にボランティア体験を採り入れる場合、何でも学生に体験をさせればよいという体験万能主義に陥る危険性がある。また、授業の運営にあたり、時代とともに変わる現代の若者のボランティア観を無視し、担当教員の過去の経験を過度に重視する危険性もある。

そこで、本研究では、授業にボランティア体験を採り入れた場合の教育的な効果について調査、分析するとともに、授業の中にボランティア体験を採り入れた場合の運営上の課題について考察する。さらに、この結果を踏まえて、今後の短期大学食物栄養専攻のカリキュラムと福祉教育・ボランティアとの関わり方について考えてみたい。

I 研究の方法

1 調査の方法

本研究は、A短期大学生活学科食物栄養専攻1年次生対象に開講されている一般教養科目「福祉とボランティア」の受講生96名を対象に実施した「短期大学における『福祉とボランティア』に関する調査」(質問紙調査)から得られたデータに基づいている。「福祉とボランティア」という科目では、前半14回は講義・演習とし、後半は受講生にボランティア体験をしてもらっている。こうした授業内容から、この調査は3回にわけて実施した。すなわち、①「福祉とボランティア」の講義・演習が始まる前(平成10年4月17日実施)、②「福祉とボランティア」の講義・演習が終わって、ボランティア体験を始める前(平成10年7月10日実施)、③ボランティア体験後(平成10年8月3日～9月15日回収)である。第1回目調査は、この科目の初日の講義で受講生に質問紙を配布し、その場で回答してもらった。第2回目調査は、この科目の講義・演習が修了した時点で質問紙を受講生に配布し、その場で回答してもらった。第3回調査は、後半のボランティア体験後に回答してもらい、郵送してもらった。第1回調査の有効回答数は87(有効回答率90.6%)、第2回調査の有効回答数は92(有効回答率95.8%)、第3回調査の回答率は75(有効回答率78.1%)であった。

2 研究の方法

A短期大学生生活学科食物栄養専攻では、一般教養科目として福祉に関する科目「福祉とボランティア」が導入されているが、その授業にボランティア体験を採り入れた場合の教育的な効果を測定し、授業の中にボランティア体験を採り入れた場合の運営上の課題について考察を行うことが本研究の目的である。そのため、本研究では、上述の「短期大学における『福祉とボランティア』に関する調査」における第2回目調査と第3回目調査から得られたデータのみを取り扱うこととする。そして、双方の結果を比較することによって、本研究の目的を達成したいと考えている。なお、今回取り扱うデータは、第2回目調査と第3回目調査を共に回答した有効回答者75名(有効回答率78.1%)によるものである。

Ⅱ 結果及び考察

1 ボランティア体験による教育的効果

(1) ボランティア活動への関心の有無及び参加意欲の変化

まず、ボランティア体験を通して、「福祉とボランティア」の受講生のボランティア活動への関心度はどのように変化したのであろうか。表1は、ボランティア活動への関心度について5段階尺度で回答してもらい、そのクロス集計の結果を表したものである。

表1より、ボランティア体験前・後で χ^2 検定を行ったが、両者の間で統計上有意味な差は認められなかった。しかし、両者の回答比率を比較すると、「関心がある」と「少し関心がある」とを合わせると、程度の差はあれボランティア活動に「(少し)関心がある」と答えた学生は、体験前では45.3%であったが、体験後では69.0%になっており、体験後の方が23.7%増加している。

次に、ボランティア活動への参加意欲の変化を調べるために5段階尺度で回答してもらい、そのクロス集計の結果を示したものが表2である。ボランティア体験前・後で比較すると、体験前は「どちらかといえば参加したい」と回答した学生を加えると「参加したい」と答えた学生は32.0%であったが、体験後は57.6%と増加している。また、検定結果に示すとおり、5%水準で統計的に有意差が確認された。

以上、表1と表2の結果から、「福祉とボランティア」の授業の中にボランティア体験を採り入れることによって、受講生のボランティア活動に対する関心や参加意欲が増加していることがわかる。

表1 ボランティア活動への関心の有無 (％)

	関心がない	あまり 関心がない	どちらとも いえない	少し 関心がある	関心がある	合計
体験前	8.0	13.3	33.3	41.3	4.0	75
体験後	6.8	5.4	18.9	56.8	12.2	74
全体	7.4	9.4	26.2	49.0	8.1	149

$$\chi^2 = 10.42 \quad df = 4 \quad n.s.$$

表2 ボランティア活動への参加意欲の変化

(%)

	参加したくない	できれば 参加したくない	どちらとも いえない	できれば 参加したい	参加したい	合計
体験前	8.0	8.0	52.0	30.7	1.3	75
体験後	4.1	2.7	35.6	48.0	9.6	73
全体	6.1	5.4	43.9	39.2	5.4	148

$$\chi^2 = 12.56 \quad df = 4 \quad p < .05$$

(2) ボランティア活動に関するイメージの変化

表3は、ボランティア体験の前後において、ボランティア活動に対するイメージの変化を調べるために、5段階尺度で回答を求め、それぞれの結果を平均値（平均値が5に近づくほど「そう思う」という回答が多かったことを示す）で表したものである。なお、項目の配列は、体験後の平均値の高い順に整理し直している。

まず、ボランティア体験後における平均値4以上のイメージ項目に注目すると、「人とのふれあい」(4.33)、「自発的なもの」(4.31)、「無償（見返りを求めない）のもの」(4.17)、「やりがいのあるもの」、「困っている人を助ける」(4.03)の順になっており、ボランティア活動を、現代社会における自己疎外を補完するものであるとか（「人とのふれあい」）、ボランティアの理念（「自発的なもの」「無償のもの」）が上位を占めている。なお、以下「自分自身・自己開発のため」(3.92)や「自分

表3 ボランティア活動に関するイメージ

	体験前			体験後			検定
	Mean	S.D.	N	Mean	S.D.	N	
12 人とのふれあい	4.39	0.69	74	4.33	0.90	75	
23 自発的なもの	4.23	0.90	73	4.31	0.88	74	
24 無償（見返りを求めない）もの	4.20	0.95	75	4.17	0.96	75	
20 やりがいがあるもの	3.99	0.94	74	4.04	0.89	75	
1 困っている人を助ける	4.19	0.99	75	4.03	1.06	75	
9 自分自身・自己開発のため	3.71	0.98	75	3.92	0.97	74	
3 自分をみがく	3.93	1.05	75	3.89	1.10	74	
2 住みやすい社会をつくる	3.96	0.89	75	3.88	1.06	75	
7 社会奉仕	4.11	0.87	73	3.68	0.94	75	**
21 施設と地域社会とをつなぐもの	3.62	1.01	74	3.64	0.92	74	
16 誰でもできる	3.65	1.37	74	3.57	1.33	74	
19 苦勞を伴う	3.69	1.08	74	3.53	1.02	75	
13 行政の行き届かない部分を補う	3.64	0.95	75	3.47	1.04	74	
8 社会・弱者のため	3.45	1.10	74	3.43	1.11	75	
10 社会とつながる手段	3.25	0.97	75	3.33	1.10	75	
15 時間がある人ができる	3.33	1.21	75	3.23	1.11	75	
6 緊張するもの	3.30	1.19	74	3.18	1.18	74	
22 不安なもの	3.19	1.16	74	3.09	1.07	75	
4 面白く楽しい	2.60	0.86	75	2.95	1.09	75	*
18 抵抗を感じる	2.89	1.03	75	2.77	1.14	75	
17 お金がかかる	2.63	1.12	73	2.72	1.16	75	
5 地味	2.96	0.93	75	2.68	1.05	75	
11 偽善的	2.91	1.10	75	2.54	1.03	72	*
14 ボランティアという言葉自体が嫌	2.19	1.02	74	2.15	1.00	75	

(注1) 平均値(Mean)は、5段階尺度（そう思わない…1、あまりそう思わない…2、どちらともいえない…3、少しそう思う…4、そう思う…5）より算出した。

(注2) 検定はt検定を施し、有意差が認められた項目のみ、*…p<.05、**…p<.01を付した。

(注3) 項目番号は調査票の番号をそのまま使用し、体験後の平均値の高い順に項目を配列し直した。

をみがく」(3.89)といった項目が続き、前述の「やりがいのあるもの」(4.04)とあわせて、体験後にはボランティア活動を自己実現としてイメージしていることもわかる。

次に、ボランティア体験前・後でt検定を実施したところ、「社会奉仕」では1%水準で、「面白く正しい」と「偽善的」では5%水準で有意差が認められた。「社会奉仕」と「偽善的」は体験後に平均値が減少している項目であり、逆に「面白く楽しい」は体験後に平均値が増加している項目である。つまり、ボランティア体験を通して、他人のためといった意味合いを持つ「社会奉仕」のイメージが減少し、逆にボランティア活動は「面白く楽しい」というイメージが強くなるといった現代の学生気質が見受けられる。

(3) ボランティア体験による意識・行動の変化

では、ボランティア体験により、学生の意識・行動がどのように変化したのであろうか。表4は、ボランティア体験が体験者の意識・行動面に及ぼすと考えられる26の効果項目について5段階尺度で回答してもらい、その結果を体験後の平均値の高い順に表したものである。表4に示すように、体験後には、「人間一人ひとりがかかけがいのない存在である」(4.20)、「何事にも苦勞が必要であると思える」(4.12)、「物事を行うには順序が必要であることがわかる」(4.05)が上位を占める。

表4 ボランティア体験による意識・行動の変化

		体験前			体験後			検定
		Mean	S.D.	N	Mean	S.D.	N	
9	人間一人ひとりがかかけがいのない存在である	4.05	1.09	74	4.20	0.97	74	
19	何事にも苦勞が必要であると思える	4.15	0.93	75	4.12	0.94	75	
20	物事を行うには順序が必要であることがわかる	3.99	0.87	75	4.05	0.91	74	
18	一見、無意味なことでも理由があると思えることがある	3.49	1.08	75	3.97	0.99	75	**
25	みんなと協力して物事を行うことができる	3.75	0.91	75	3.87	0.93	75	
15	誰に対しても挨拶ができる	3.72	1.08	75	3.84	1.18	73	
5	優しさ・思いやりをもって人に接することができる	3.76	0.92	75	3.84	0.90	75	
23	みんなで決めたルールは必ず守ることができる	3.60	1.02	75	3.81	0.90	74	
11	関心がなくても人の話に耳を傾けることができる	3.53	1.00	75	3.70	1.07	74	
16	自分の立場をわきまえた行動や発言ができる	3.39	0.98	74	3.68	0.97	75	
10	思い通りにならないことがあっても我慢できる	3.27	0.98	75	3.63	1.02	75	*
17	子どもや老人などと人間関係を築くことができる	3.39	0.93	74	3.52	1.04	75	
24	同世代の人と容易に仲間づくりができる	3.32	0.93	75	3.50	1.08	74	
26	誰に対してもわけへだてなく接することができる	3.32	1.00	75	3.45	1.11	75	
8	気持ちは安定している	3.16	1.22	74	3.44	1.11	75	
12	人間が好きである	3.41	1.07	75	3.42	1.21	74	
14	福祉や社会に関心がある	3.11	1.03	75	3.38	0.95	74	
1	その場その場に応じて行動できる	2.91	1.05	75	3.29	0.91	75	*
7	自分はなくてはならない存在である	2.96	1.09	75	3.28	1.03	75	
21	柔軟に物事が考えられる	3.04	0.93	73	3.26	0.98	73	
3	目先のことより目標に向かって頑張る	3.03	1.03	75	3.20	1.12	75	
13	自発的に行動できる	2.89	1.10	75	3.20	1.05	74	
2	何事に対しても意欲的に行動できる	2.87	1.01	75	3.13	0.98	75	
6	何事に対しても自信をもって対処できる	2.63	1.04	75	3.11	1.01	75	**
22	自分を客観的に評価することができる	2.97	1.10	75	3.04	1.10	72	
4	人間の力を越えたものがあると思えることがある	2.93	1.12	75	2.88	1.30	75	

(注1) 平均値(Mean)は、5段階尺度(そう感じない…1, あまりそう感じない…2, どちらともいえない…3, 少しそう感じる…4, そう感じる…5)より算出した。

(注2) 検定はt検定を施し、有意差が認められた項目のみ、*…p<.05, **…p<.01を付した。

(注3) 項目番号は調査票の番号をそのまま使用し、体験後の平均値の高い順に項目を配列し直した。

そして、体験前・後でt検定を施したところ、「思い通りにならないことがあっても我慢できる」、「その場その場に応じて行動できる」では5%水準で、「一見無意味なことでも理由があると思えることがある」、「何事に対しても自信をもって対処できる」では1%水準で有意差が確認された。いずれも平均値が増加している項目である。これらの項目は、発見・気づきの項目（「一見、無意味なことでも理由があると思えることがある」）であるとともに、行動に関する項目（「思い通りにならないことがあっても我慢できる」、「その場その場に応じて行動できる」）である。また、ボランティア体験は、自信・意欲の側面（「何事に対しても自信をもって対処できる」）にもかなり影響を及ぼしている⁵⁾。

(4) 食物栄養専攻学生にとってのボランティア活動の教育的意義

さらに、ボランティア体験には、どのような教育的な意義があるのだろうか。そこで、授業の中でボランティア体験をした食物栄養専攻の学生に、教育的意義として重要度が高いと思われる4項目を選んで順位を付けてもらい、それぞれについて1位4点、2位3点、3位2点、4位1点というふうに累積得点を算出したものが表5である。

ボランティア体験後の得点では、「優しさ・思いやりなど人間性を培うのに役立つ」（173点）と、「食事を摂取する老人・障害者・乳幼児のことを知り、色々なことが学べる」（122点）という対象（利用者）の理解が上位を占める。

また、ボランティア体験の前後を比較すると、「より多くの専門職の人たちを知り、色々なことが学べる」（体験前60点、体験後85点）が増加している。このことから、受講生にとっては、ボランティア体験が福祉の領域の様々な専門領域を持った人々の存在を知る契機となっている。

（文責 橋本 勇人）

表5 食物栄養専攻学生にとってのボランティア活動の教育的意義（W得点）

	体験前	体験後	合計
6 優しさ・思いやりなど人間性を培うことに役立つ	170	173	343
3 食事を摂取する老人・障害者・乳幼児のことをよく知り、色々なことが学べる	113	122	235
2 より多くの専門職の人たちを知り、色々なことが学べる	60	85	145
4 対人援助、介護の仕方、食事援助について学べる	83	77	160
8 相手方の価値観が違うことに気づき、認めるようになる	83	73	156
10 子どもや老人などと人間関係を築く能力がもてるようになる	48	61	109
7 何事に対しても自信を持って対処できるようになる	49	50	99
1 調理実習施設以外の色々な施設について理解できる	60	45	105
5 老人福祉・児童福祉・給食サービスなどについての、行政・制度について学べる	30	26	56
9 社会の中における自分の存在理由を確認する機会が得られる	32	23	55
11 活動を通じて問題意識が生まれ、意欲をもって授業が受けられる	11	14	25

（注）W得点（重みづけ得点）は、1～4位まで重要度の高い順に回答してもらい、それを1位…4点、2位…3点、3位…2点、4位…1点に換算し、累積得点を求めたものである。

2 食物栄養専攻のカリキュラムにおける「福祉とボランティア」の取り扱い

(1) 食物栄養専攻のカリキュラムに「福祉とボランティア」を採り入れることの賛否

表6は、食物栄養専攻のカリキュラムに「福祉とボランティア」という一般教養科目を採り入れることについての賛否をボランティア体験前・後で尋ね、その結果をクロス集計で示したものである。体験前は「どちらともいえない」と回答した学生が50%を占めていたのに対して、体験後では「どちらかといえば賛成である」あるいは「賛成である」と回答した学生が70.6%を占めている。また、 χ^2 検定を施したところ、0.1%水準で有意差が認められた。このことから、多くの学生は、ボランティア体験を通じて、食物栄養専攻のカリキュラムに「福祉とボランティア」という一般教養科目を採り入れることに強く賛成するように変化したといえる。

また、程度の差はあれ「賛成である」と回答した70.6%の学生に対して、「福祉とボランティア」という科目を必修科目とすべきか、それとも選択科目とすべきかについても回答を求めた。そのクロス集計を示したものが表7である。表7に示すように、統計的に有意な差は確認されなかったが、体験前よりも体験後の方がより一層「選択科目とすべきである」と回答する傾向が強くなっている。

つまり、表6と表7の結果をあわせて考えると、受講生たちは「福祉とボランティア」を食物栄養専攻のカリキュラムに採り入れることには賛成しているが、それはあくまで「選択科目」であるべきだという条件付きのもとでの回答であることを示している。

表6 カリキュラムに「福祉とボランティア」を採り入れていることについての賛否 (%)

	反対である	どちらかといえば 反対である	どちらとも いえない	どちらかといえば 賛成である	賛成である	合計
体験前	2.7	9.5	50.0	25.7	12.2	74
体験後	4.0	0.0	25.3	41.3	29.3	75
全体	3.4	4.7	37.6	33.6	20.8	149

$$\chi^2 = 21.31 \quad df = 4 \quad p < .001$$

表7 「福祉とボランティア」の必修・選択 (%)

	必修科目	選択科目	合計
体験前	44.8	55.2	29
体験後	38.8	61.2	49
全体	41.0	59.0	78

$$\chi^2 = 0.28 \quad df = 1 \quad n.s.$$

(2) ボランティア活動の自発性の原則とボランティア体験の強制の問題

次に、ボランティア活動の自発性の原理と、授業におけるボランティア体験の強制との対立問題について考えてみたい。

表8は、ボランティア活動の4原則（「自発性」「無償性」「社会性・連帯性」「先駆性・開拓性」）に関して、ボランティアを行う上で重要度が高い順に回答してもらい、その順位得点を累積したW得点（重みづけ得点）を示したものである。合計得点を見ると、自発性が566点、無償性が331点、社会性・連帯性が336点、先駆性・開拓性が227点と、自発性の原理が最も重要度が高い。このこと

に関連して、ボランティア体験を強制することについての賛否をボランティア体験前・後で尋ねてみたところ、有意差は認められなかったものの、「(どちらかといえば、を含む) 反対である」と答える傾向が強かった体験前に比べて、体験後の方が「どちらともいえない」や「どちらかといえば賛成である」という回答が増加している(表9)。

また、授業においてボランティア体験を強制することについての賛否をボランティア体験前・後に求め、そのクロス集計の結果を示したものが表10である。表10についても有意差は認められなかったが、体験前・後を比較すると「反対である」と答える学生は5.3%から10.7%へと体験後の方が増加するが、それ以上に「どちらかといえば賛成である」も含めると「賛成である」と回答する学生が41.3%から52.0%へと増加している。

さらに、授業において実際にボランティア体験を課していることについての賛否についても、表10と同様に回答を求め、クロス集計を施した(表11)。ここでも χ^2 検定による有意差は認められなかったが、ボランティア体験前と後で比較した場合、「どちらかといえば賛成である」の回答を含めると「賛成である」と答えた学生は体験前では50.7%であったのが、体験後には65.3%に増加している。

以上の結果と表1、表2の結果を関連づけて考えると、受講生たちは、ボランティア活動の原則として自発性を重要視しているが、実際に授業でボランティアを体験することによって、それが強制であったとしても、満足のいく有意義なボランティア体験が経験できた場合、授業でボランティア体験を課すことに対して賛成意見が増すことがわかる。このことから、授業において強制的にボランティア活動に参加させたことが、結果的に、次回の自発的なボランティア活動へのきっかけとして機能するのであれば、ボランティア学習への意欲の促進という意味において、授業におけるボランティア体験は、非常に教育的な意義あるいは価値があると考えてもよいだろう⁶⁾。

表8 ボランティア活動の4原則(W得点)

	自発性	無償性	社会性・連帯性	先駆性・開拓性
体験前	274	161	174	106
体験後	292	170	162	121
合計	566	331	336	227

(注) W得点(重みづけ得点)は、4原則を1～4位まで重要度の高い順に回答してもらい、それを1位…4点、2位…3点、3位…2点、4位…1点に換算し、累積得点を求めたものである。

表9 ボランティア体験の強制について

(%)

	反対である	どちらかといえば 反対である	どちらとも いえない	どちらかといえば 賛成である	賛成である	合計
体験前	22.7	34.7	30.7	8.0	4.0	75
体験後	17.3	22.7	38.7	18.7	2.7	75
全体	20.0	28.7	34.7	13.3	3.3	150

$$\chi^2 = 6.51 \quad df = 4 \quad n.s.$$

表10 授業におけるボランティア体験の強制について (%)

	反対である	どちらかといえば 反対である	どちらとも いえない	どちらかといえば 賛成である	賛成である	合 計
体験前	5.3	22.7	30.7	33.3	8.0	75
体験後	10.7	8.0	29.3	37.3	14.7	75
全 体	8.0	15.3	30.0	35.3	11.3	150

$$\chi^2=8.26 \quad df=4 \quad n.s.$$

表11 授業におけるボランティア体験の賛否 (%)

	反対である	どちらかといえば 反対である	どちらとも いえない	どちらかといえば 賛成である	賛成である	合 計
体験前	6.7	10.7	32.0	36.0	14.7	75
体験後	4.0	8.0	22.7	41.3	24.0	75
全 体	5.3	9.3	27.3	38.7	19.3	150

$$\chi^2=3.95 \quad df=4 \quad n.s.$$

(3) 授業におけるボランティア体験の評価

授業の中にボランティア体験を採り入れた場合、そこで問題となるのはボランティア体験の評価である。つまり、ボランティア体験を評価の対象にすべきか、それともすべきではないのか、それから評価対象とした場合に、誰が何に注目して評価すればよいのかを適切に考えなくてはならない。

そこで、授業におけるボランティア活動の見返りを求めることに賛成か反対かを答えてもらい、それをクロス集計したものが表12である。表12に示すとおり、有意差は認められないが、ボランティア体験前・後で比較すると、体験前では「反対である」と答える傾向が強かったのに対して、体験後では「どちらともいえない」と回答する学生が53.3%を占めている。また、ボランティア活動歴が就職への評価に反映されることについても、体験後では「どちらともいえない」と回答する学生が約4割強を占め、4割弱の学生が「反対」と答えている(表13)。ところが、一般的に、ボランティア活動の見返りについては、体験後には5割強の学生が反対する(表14)。つまり、ボランティア体験後、ボランティア活動の無償性の原理に基づいて、観念的には、ボランティア活動の見返りがあることについて反対意見が強くなるが、授業や就職という局面では一概に「反対である」とは言えず、「どちらともいえない」と答える傾向が強くなる。

では、もし授業においてボランティア体験を評価するならば、受講生たちは誰がどのように評価すべきだと考えているのだろうか。そのことについてボランティア体験前・後に5段階尺度(5に進むほど「賛成」)で回答を求め、そこで得た回答を平均値で示したものが表15である。まず、評価者については、いずれの項目も体験前・後で有意差は認められなかったが、「教員、学生、施設の三者が協力して行う」が最も平均値が高い。また、評価の観点についても有意差は確認されなかったが、「ボランティア経験をした学生個人の意識変化で評価すべきである」が最も平均値が高く、次いで「学生個人の自己目標の到達度で評価すべきである」という項目が続く。

以上の結果から、授業においてボランティア体験を評価することについては賛成とも反対とも「ど

「ちらともいえない」が、もし単位認定の関係で評価の対象にするならば、教員、学生、施設職員の三者が協力して、学生個々のボランティア体験を通しての意識変化に注目して評価を行うべきであるという回答が得られた。

表12 授業におけるボランティア体験への見返りの賛否 (%)

	反対である	どちらかといえば		賛成である		合計
		反対である	いえない	賛成である		
体験前	13.3	22.7	44.0	13.3	6.7	75
体験後	9.3	17.3	53.3	10.7	9.3	75
全体	11.3	20.0	48.7	12.0	8.0	150

$$\chi^2=2.29 \quad df=4 \quad n.s.$$

表13 ボランティア活動歴が就職への評価になることについての賛否 (%)

	反対である	どちらかといえば		賛成である		合計
		反対である	いえない	賛成である		
体験前	18.7	21.3	42.7	13.3	4.0	75
体験後	14.7	22.7	44.0	14.7	4.0	75
全体	16.7	22.0	43.3	14.0	4.0	150

$$\chi^2=0.45 \quad df=4 \quad n.s.$$

表14 ボランティア活動に対する見返りの賛否 (%)

	反対である	どちらかといえば		賛成である		合計
		反対である	いえない	賛成である		
体験前	10.7	22.7	57.3	6.7	2.7	75
体験後	19.4	31.9	36.1	5.6	6.9	72
全体	15.0	27.2	46.9	6.1	4.8	147

$$\chi^2=8.06 \quad df=4 \quad n.s.$$

表15 ボランティア体験の評価者と評価内容

	体験前			体験後			検定
	Mean	S.D.	N	Mean	S.D.	N	
4 教員、学生、施設の三者が協力して行う	4.01	1.08	73	3.91	1.20	74	n.s.
3 ボランティア受け入れ施設が行う	3.62	1.02	73	3.61	1.09	74	n.s.
2 ボランティア学生自身が行う	3.33	1.15	73	3.45	1.10	74	n.s.
1 教員が行う	2.71	1.20	73	2.62	1.13	73	n.s.
3 ボランティア経験をした学生個人の意識変化で評価すべきである	3.90	0.97	72	3.63	1.20	73	n.s.
4 学生個人の自己目標の到達度で評価すべきである	3.41	0.96	73	3.59	1.00	74	n.s.
5 評価すべきではない	3.46	1.12	72	3.31	1.25	74	n.s.
1 ボランティアの内容や種類で評価すべきである	2.81	1.37	73	2.65	1.19	74	n.s.
2 ボランティアの実施回数(時間)で評価すべきである	2.33	1.07	72	2.28	1.06	74	n.s.

(注1) 平均値 (Mean) は、5段階尺度 (そう思わない…1, あまりそう思わない…2, どちらともいえない…3, 少し思う…4, そう思う…5) より算出した。

(注2) 検定はt検定を施したが、いずれの項目においても有意差が認められなかった。

(注3) 項目番号は調査票の番号をそのまま使用し、体験後の平均値の高い順に項目を配列し直した。

(4) ボランティア体験前の事前指導について

さらに、ボランティア体験前の事前指導として、どのような内容の指導が必要と思われるのかについて、設定した10項目を5段階尺度で回答してもらった。その回答結果を平均値で表し、平均値の高い順で整理し直したものが表16である。表16より、平均値3以下の項目は、「ボランティアに関する情報提供だけで十分である」と「特に何もする必要はない」の2項目のみで、何らかの事前指導が必要であるという認識を受講生たちは持っていることがわかる。特に、「ボランティアとしての最低限のエチケット（服装、アクセサリ、頭髮、言葉遣い、時間厳守）について指導すべきである」は最も平均値が高く、ボランティア体験前・後に関係なく、平均値4以上と他の項目と一線を画す値を示している。つまり、それだけ、施設等でボランティアを行う際に必要となるエチケットはぜひとも知っておいた方がよいと受講生たちが認知していることになる。

しかし、体験前と後の平均値についてt検定を施したところ、いずれの項目も有意差は認められなかった。この理由について解釈を加える際、筆者らが過去に保母養成課程の学生と当該保母養成課程の卒業生を対象に同様の質問紙調査を行った研究結果が参考になる⁷⁾。この研究結果によれば、ボランティア体験前の事前指導として、同様にエチケットの指導が最も平均値が高く、必要であると在學生も卒業生も認識していた。しかし、両者の平均値についてt検定を施したところ、0.1%水準で有意差が確認された。つまり、在學生がボランティア体験に入る前にエチケットの指導が必要であると思っている以上に、現在施設に勤務している、あるいは過去に施設で勤務していた卒業生はより一層エチケットの指導が必要であると認識していた。

このことから、受講生のボランティア体験前・後で有意差が認められなかったのは当然の結果といえる。実際に事前指導が必要であると考えられるようになるのは、ボランティアを体験した後ではなく、ボランティアの人たちを受け入れる側を体験した時ではないだろうか。その意味からいえば、受講生はボランティア体験をしてもボランティア参加前のエチケット指導の重要性を強く感じなかったわけではない。それはむしろボランティアを行う受講生側の認識の限界といわざるを得ない。

表16 ボランティア体験前の事前指導について

	体験前			体験後			検定
	Mean	S.D.	N	Mean	S.D.	N	
5	4.11	0.89	75	4.11	0.96	75	N.S.
3	3.77	0.94	74	3.77	0.92	75	N.S.
6	3.83	0.91	75	3.75	1.02	73	N.S.
7	3.91	0.85	75	3.73	1.04	75	N.S.
8	3.69	0.85	75	3.72	0.93	75	N.S.
1	3.79	0.91	75	3.71	0.96	73	N.S.
2	3.83	0.96	75	3.69	0.91	74	N.S.
4	3.91	0.90	75	3.68	1.01	75	N.S.
9	2.36	0.93	75	2.43	1.00	75	N.S.
10	1.88	0.99	75	1.97	1.07	75	N.S.

(注1) 平均値 (Mean) は、5段階尺度（そう思わない…1、あまりそう思わない…2、どちらともいえない…3、少し思う…4、そう思う…5）より算出した。

(注2) 検定はt検定を施したが、いずれの項目においても有意差が認められなかった。

(注3) 項目番号は調査票の番号をそのまま使用し、体験後の平均値の高い順に項目を配列し直した。

い。したがって、短期大学の授業において、受講生を施設等でボランティア体験をさせる場合には、受講生が認識している以上にボランティア先ではエチケットについて気を配る必要があることを大学の教官が受講生に指導する必要があるのである。 (文責 別惣淳二)

おわりに

以上の結果をまとめると以下ようになる。ボランティア体験後に受講生は、

- ① ボランティア活動に対する関心や参加意欲が増加している。
- ② 発見、気づき、意欲、行動、自信の項目に変化が見られる。
- ③ 他人のためといった意味合いを持つ「社会奉仕」のイメージが減少し、逆にボランティア活動は「面白く楽しい」というイメージが強くなるといった現代の学生気質が見受けられる。
- ④ 教育的意義では、「優しさ・思いやりなど人間性を培うのに役立つ」、「食事を摂取する老人・障害者・乳幼児のことを知り、色々なことが学べる」という利用者の理解が上位を占める。また、ボランティア体験が福祉の領域に様々な専門領域の人々がいることを知る契機ともなっている。
- ⑤ 「福祉とボランティア」を食物栄養専攻のカリキュラムに採り入れることには賛成しているが、「選択科目」という条件付きである。
- ⑥ ボランティア活動の原則として自発性を重要視しているが、有意義なボランティア体験が経験できた場合は、授業でボランティア体験を課すこと（強制）に対して賛成意見が増す。
- ⑦ もし単位認定の関係で評価の対象にするならば、教員、学生、施設職員の三者が協力して、学生個々のボランティア体験を通しての意識変化に注目して評価を行うべきである。
- ⑧ また、短期大学の授業において、受講生を施設等でボランティア体験をさせる場合には、受講生が認識している以上に、エチケット等について気を配る必要があることを大学の教官が受講生に指導する必要がある。

なお、今回は調査研究の正確性を期すため、学生が実際に経験した「食物栄養専攻の一般教養の中で」ボランティア体験を授業に導入することを中心に考察を行った。しかし、将来のカリキュラムのあり方を明らかにするためには、枠組みを「専門科目を学習する上でのボランティア体験の有効性」及び「専門科目の中に人間に関する問題をとり入れること」と食物栄養専攻の専門領域や今後の専門領域のあり方まで範囲を広げて検討する必要がある。そこで、これらの事項について5段階尺度で回答してもらった結果が、表17及び表18である。

表17では、「専門科目を学習する上でのボランティア体験の有効性」について、ボランティア体験前・後で χ^2 検定を行ったところ、両者の間で統計上有意な差は認められなかった。しかし、「少し役に立つ」と「役に立つ」を合わせると、体験前で76.0%の受講生が、体験後では77.3%の受講生が、専門科目を学習する上でボランティア体験が有効であると考えている。

また、食物栄養専攻の専門科目の内容に「福祉とボランティア」をも包摂する「人間に関する問題」を採り入れることについて、尋ねた結果が表18である。

表17 専門科目を学習する上でのボランティア体験の有効性 (%)

	役に立たない	あまり役に立たない	どちらともいえない	少し役に立つ	役に立つ	合計
体験前	1.3	6.7	16.0	56.0	20.0	75
体験後	0.0	8.0	14.7	48.0	29.3	75
全体	0.7	7.3	15.3	52.0	24.7	150

$$\chi^2 = 2.92 \quad df = 4 \quad n.s.$$

表18 専門科目の内容に「人間に関する問題」を採り入れることについて (%)

	反対である	どちらかといえば反対である	どちらともいえない	どちらかといえば賛成である	賛成である	合計
体験前	0.0	1.3	46.7	38.7	13.3	75
体験後	2.7	5.3	24.0	44.0	24.0	75
全体	1.3	3.3	35.3	41.3	18.7	150

$$\chi^2 = 11.80 \quad df = 4 \quad p < 0.5$$

表18では、ボランティア体験前・後でt検定を施したところ、5%水準で有意差が見られた。ボランティア体験前は、「どちらかといえば賛成である」と「賛成である」を合わせると52.0%の受講生が賛成していたが、ボランティア体験後は、68.0%に増加している。この点について、自由記述を見てみると次のようなものがある。「栄養士を目指しているが、食事介助をはじめてした。食事介助では、各人で、食べられる形状、食べるスピード、食べる量が異なり、また、飲み込めるかどうかの判断も異なることを知った」とか、「ある男の子は腎臓が悪くて、カレーライスやソース、脂っこいものはだめだが、その子だけを特別メニューにするのではなく、みんなで同じ昼食を食べた。栄養士さん以上に、この子のために毎日食事を作っているお母さんは大変だろうと思った」「食事作りのボランティアをしたが、皆で食べるとおいしいということを知った」「今も、あのおじいさんもどこかで私と同じ時を過ごしているのだなと考えるようになった」等々、栄養と人間との関係に論及している記述は枚挙に暇がない。ボランティア体験を通して、「栄養学は、生きた人間を相手にしている」ことへの理解が深まったのではないかと推測され、今後の食物栄養専攻のカリキュラムと福祉教育・ボランティアとの関わり方についても一定の方向を示しているように思われる。

なお、今後の課題としては、家庭生活、地域社会での生活、あるいは小・中・高等学校・大学・短期大学という社会全体の中で、短期大学に要請される福祉教育・ボランティアの中身を吟味することが必要となってくる⁸⁾。特に、小・中・高等学校での福祉教育・ボランティアとの違いは何であるのかということが検討されなければならない。また、授業の中身についても、ボランティア体験を中心に理解を深めるのか、ボランティア・コーディネーター論まで踏み込んだ体験を取り込むのか等ということも、その学科の目指す目的と与えられた環境との関係の中で再検討していく必要がある。

(文責 橋本・別惣・中原)

注

1) 厚生省関係では、平成5年4月14日に厚生省告示第117号「国民の社会福祉に関する活動への参加の促進を図るための措置に関する基本的な指針」が出され、平成5年7月29日には、中央社会福祉審議会地域福祉専門分科会において「ボランティア活動の中長期的な振興方策について」がまとめられている。同じく平成5年には、全国社会福祉協議会でも「ボランティア活動推進7ヵ年プラン構想」を提案されている。

また、文部省関係では、平成3年4月の中央教育審議会答申「新しい時代に対応する教育の諸制度の改革について」や、平成4年7月の生涯学習審議会答申「今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について」においても、ボランティア活動の推進やその評価の必要性が述べられている。平成8年4月の生涯学習審議会答申「地域における生涯学習機会の充実方策について」では、施設におけるボランティアの参加・支援を推進するための受け入れ体制の整備について提言している。中央教育審議会の「21世紀を展望した我が国の教育のあり方について」の第1次答申（平成8年7月）では、地域社会における教育の充実方策の1つとしてボランティア活動の体験や学習の機会の整備などについて提言し、第2次答申（平成9年6月）では、教員養成・研修の段階で介護などのボランティア体験を積むことや、採用にあたってボランティア活動の実績などを評価することを進めることを提言した。平成9年6月には、教員免許特例法において、小中学校の教諭の普通免許を受けようとする者は、1週間以上の介護等体験が必要とされた。

さらに、総務庁から平成6年3月に意見答申「“豊かさゆとりの時代”に向けての青少年育成の基本的方向—青少年期のボランティア活動の促進に向けて」が出され、ボランティア活動の支援環境づくりや参加の場の提供の重要性が指摘されている。

詳細については、『ボランティア白書95年版』、社団法人日本青年奉仕協会、1995年、を参照されたい。

2) 過去の、教育関係者（自己実現）と福祉関係者（他者実現）の若干の理念の相違については、福祉教育・ボランティア学習学会歴史研究プロジェクトの会合で、福山平成大学木谷宜弘教授より示唆をいただいた。

3) 前者の側面については、以下の文献を参照されたい。木谷宜弘(1997)「大学におけるボランティア・マネージメントに関する研究」、福山平成大学、『経営福祉学研究』、43-61ページ。別惣淳二・橋本勇人・豊山大和(1998)「保母養成における福祉ボランティアの教育的意義に関する一考察：卒業生と在学生の意識調査の比較分析」、『山陽女子短期大学研究紀要』第24号、123-136ページ。橋本勇人・別惣淳二・豊山大和・三原博光(1999)「介護福祉養成におけるボランティアの意義に関する一考察」、日本介護福祉教育学会、『介護福祉教育』第4巻第2号、26-29ページ。橋本勇人・別惣淳二・豊山大和(1998)「介護福祉士養成と福祉ボランティアの関係：介護福祉士養成制度発足以来の卒業生を対象とした調査を通して」、川崎医療福祉学会、『川崎医療福祉学会誌』、第8巻第2号、257-269ページ。

また、後者の側面については、以下の文献を参照されたい、豊山大和・橋本勇人(1996)「ボランティア活動に関する一考察」『日本福祉教育・ボランティア学習学会第2回大会抄録』, 148-149ページ。橋本勇人・豊山大和(1997)「介護福祉科学生のボランティア活動に関する一考察」『日本介護福祉教育学会抄録』, 60-61ページ。

さらに、これらの側面を支える法制度との関係については、以下の文献を参照されたい。橋本勇人(1996)「ボランティア団体の法人格取得に関する研究：仮称市民活動促進法案をめぐって」, 旭川荘医療福祉研究所, 『旭川荘研究年報』第27巻第1号, 40-45ページ。橋本勇人(1998)「ボランティア活動中の事故と法的責任：法と道德の衝突」, 旭川荘医療福祉研究所, 『旭川荘研究年報』第29巻第1号, 42-47ページ。

- 4) 教育関係者と福祉関係者とが一体となって福祉教育やボランティアの推進・研究をすすめているものとして、例えば日本福祉教育・ボランティア学習学会がある。
- 5) 木谷(1997)は、「また、社会問題解決能力をもたせ、具体的に社会行動能力を育て、自信と誇りをもって、社会生活に臨めるように指導教育する必要がある」(47ページ)と述べているが、本調査研究で、実際にそのような効果があることが統計的に明らかになったといえよう。
- 6) 木谷(1997)が、「ボランティア活動は、指導の時点でボランティアの本命といわれる自発性が問われることではない。活動をしているうちに、自発性が生まれてくるのがボランティアだといってよい」(49-50ページ)と指摘しているのも同趣旨であろう。なお、橋本・豊山(1997)においても、一定の時期に限定し、かつ方法に配慮すれば、きっかけづくりに若干の強制の要素が入っても、自発性の原則と必ずしも矛盾しないと考えた。
- 7) 別惣淳二・橋本勇人・豊山大和(1998), 前掲論文, 123-136ページ。
- 8) 大橋謙策(1997)「福祉教育・ボランティア学習の理論化と体系化の課題」, 日本福祉教育・ボランティア学習学会, 『福祉教育・ボランティア学習研究年報』第2巻, 東洋堂企画出版社, 29-31ページ。なおその際、低学年での福祉教育・ボランティア学習の必要性は大きいですが、安易に準備が不十分なまま導入すると、ボランティアという数少ない有力な道具の安売りになりかねない。例えば、今回の自由記述でも、「中学校の夏休みの宿題でグループごとにボランティアをすることになり、いやいやながら海岸のごみ拾いをすることになった。小人数で広い海岸の清掃などすべてできるわけなく、予想どおり海岸で遊んだだけだった。それ以来今日まで、ボランティアは意味のないものと思っていた」という主旨のものがあり、他にも類似のものが散見される。ボランティア体験は、諸刃の剣であることに留意する必要がある。

謝辞

ボランティア体験を採り入れた授業を運営するにあたり、中国短期大学教授 菅 淑江先生をはじめ関係諸先生から御助言をいただいた。この場を借りて御礼申し上げます。あわせて本調査研究に協力していただいた学生諸君にも御礼申し上げます。